

---

# 愛染果実

冴島岐之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛染果実

### 【Nコード】

N1637D

### 【作者名】

冴島岐之

### 【あらすじ】

もし、私がもっと早く生まれてきたなら、彼は選んでくれただろうか。

出会わなければ良かった、なんて思ったことはないけれど、それでも、もっと早く出会いたかったと、そう思うことは、ある。

「バカにしないで。私、もう二十歳よ？ お酒だって煙草だって問題ないし、自炊だってできるもの。子供じゃないのよ」

声を荒げて、私はそういった。酔っているのかもしれない、とどこかばんやり思う。もちろんお酒ではない。

店に、夜に、彼に、だ。

薄暗い店内。聞こえるのは周りの客の声と静かな音楽。洋楽だ、聞いたことはないけれど、すごく昔のものだろう。

カクテルが売りの、青いライトで照らし出される店内は、どこことなく妖しくて、知的で、私はすぐに彼にぴったりの店だと思った。

「それでも、僕が二十歳のとき、君は学生だよ。小学生だ」

彼は笑った。

ブランデーの入ったグラスを持つ。氷が溶ける音がした。

「そうだけど、今は違うでしょう？ 少なくともロリコンになんて見えないわよ」

私はそういつて横目で彼の、ショウジ庄司さんの顔を盗み見た。また笑っている。参ったな、と小声で呟いた。聞こえないと思っているのか。

「おかしいよ、君」

「あなたの方がよっぽどおかしいわ。人には散々関係ないといったのけたくせに」

「だつてほら」

お決まりの科白に、私はもううんざりしてる。

「聞きたくないわ。飽きたもの。芸がないわよ」

「うん……その通り、だけどね」

目だけで笑つて、グラスに口付ける。それだけなのに、たったそれだけの動作なのに、私は庄司さんがするひとつひとつの動作にすっかり釘付けになっている。

もしかしたらブランデーを飲むふりをして私の魂でも飲んでいるのかもしれない、なんて愚かな空想が頭を過ぎるほど。

「けど、本当にもつたいないよ」

彼はまたそういう。そうしてあの笑みを口元に浮かべる。答えを遠ざけてしまう。

いつそのこと塞いでしまいたい。何もいえなくなってしまうばい。そうしたら私は臆することなく彼の隣でのんびり眠っていられるのに、と思う。

「それは、私が決めるのよ」

「……正論だね」

「私は、あなたがいいの。あなたじゃなきゃ駄目なのよ」

「……賛同しかねるなあ」

「知らないわ。私が決めるんだから」

私が決める。誰の隣にいたいかわからない、私だって決められる。

「お願いだから、イエスじゃなくてもいいから、認めてはくれないの？」

眉を寄せて、唇を突き出して、うつむきがちにそうばやいた。子供っぽいからやめようと思っていたけれど、この人の強情さにはお手上げだ。

ほら、彼はやっぱり、笑うだけ。

「僕はもう、おじさんだよ。そりゃ、君みたいに若くて綺麗な子にいい寄られて、悪い気はしないけどね」

そんなやさしき、振りまかなくてもいいのに。  
息苦しくなってしまう。

「……私が」

視線を床に落とす。彼の茶色い革靴の光沢を追いかける。

「私が、若くなかったら、選んでくれた？」

沈黙。

カクテルを造る音。

誰かの声。

音楽。

氷が溶けた。

空気がふるえた。

彼はやっぱり、笑うだけ。

ずるい。そう思ってしまうのは、私が子供だからだろうか。

\*\*\*

「それで？ 俐仁<sup>トリ</sup>、なんていった？」

「何も。くやしくって、一万円札叩きつけて帰ってやったわよ」

「へー」

授業中の学食には、数えるほどしか人がいない。今は三限が始まったところだ。いつもは真面目に教室で寝ているけれど、怒っているからお腹が空いてしょうがなかった。

どうせ細やかな神経なんてない、私はひどいフラレ方をしたってやけ食いするタイプだ、と思う。

目の前でずるずるとラーメンを食べる岡田を見ながら、私もそれにすれば良かったかな、なんて今更なことを思った。

「どうしたらいいのかしら……」

ほうつとため息をついた。

ぐるぐるとフォークを回してスパゲッティを巻きつけ、口に運ぶ。トマトソースの味。スパゲッティなんて一本も絡んじやいなかった。

まるで庄司さんに相手にされない私みたいだ、と思う。なんて滑稽だろう。

「別に、どうもしなくていいだろ」

「なんでよ」

岡田はまたずるずるとラーメンを口へ運ぶ。

オカダスケル

岡田杰というこの男は、何をしていても無関心そうな表情をしている。それでもこうして相談をすればきちんと答えてくれる。意外と律儀な奴、というのが私が最近つけた評価。

「好きになるときには好きになるもんだろ。どうにかするもんじゃねーし、できるもんでもない」

「そうだけど、」

もっと、大人になれたらいい。

いいかけて、言葉が続かずにため息をこぼした。

昨日の庄司さんは、やはり私を子供扱いしていると思えない。

「無理とか頑張るとか必要ないって、俺は思っけど」

「……うん」

それから岡田は、やっぱり興味がなさそうにラーメンを口へ運んでいる。私も巻きつけすぎたパスタを一度落とし、自分の口にあう量に巻きなおして口へ運んだ。味が濃い。既に渴き始めていたそれは、パスタ同士で絡み合っていた。

私の頭の中みたいだ。

「あのね、」

ぐるぐるした頭の中で、私は適当な言葉を探す。岡田がわずかに顔をあげたのがわかった。

「私は、せめて女として見てもらえればいいの。それだけでも充分なのよ。そう、だって、そうじゃないと始まらないじゃない。だから、せめてそうやって見てもらえるように、努力したいのよ」

「なあ」

「何？」

「俐仁、おじさんだから、っていうんだろ」

「ええ」

「それって結局、女として見てるってことじゃねーの？ 年齢引つ張り出してくるなんてさ」

「そう？」

「さあな、」

自分でいっただくせに、その無責任な返事はなんだ、そう思って私は岡田を睨みつけた。

当の本人はラーメンに夢中で、どんぶりを持ち上げると、スープを飲み始めた。ごくりと喉が鳴る音が聞こえて、それからことりと



テーブルにどんぶりが置かれた。

「でも」

顔をあげて私を見る岡田の顔は、にやりと不敵な笑みを浮かべていた。こいつが笑うなんて、珍しいこともあるものだ、と思う。

「お前のことになる、不自然に話を逸らすんだ。あの人」

「……どういうこと？」

「いつてやってもいいけど……」

そういつて岡田はちらりと私の様子をうかがっているようだった。

「何よ。明日のお昼ご飯でもおごればいいのかしら？」

面倒に思いながらもそういつと、岡田はまたにやりと笑った。イコトではなさそうだが、直感でそう思う。

私は思わずぐっと身構える。

何をいおうとしているのか。庄司さんのことなら、そうは思いつけれど、内容によってはあまり聞きたくはないのも本音だ。悪い意味の方だったら立ち直れないかもしれない、と思う。まあ、お昼くらいで済むなら、イイ、かも知れない。いや、やっぱりイヤだ。

私が構えている様子に、岡田は一層口角を上げた。冷や汗をかきそう。

「バイト、変わって」

「えっ」

私は目をまるくし、素っ頓狂な声を上げてしまった。  
私の警戒は、一気に崩れ去る。バイトを、変わる？

「バイトって、家庭教師の？」

驚いて見つめる私から「そ」といって視線を外し、岡田は煙草を取り出して、火をつけた。校内なのに、と思う。ここは喫煙所じゃない。

「相手は中坊だし、秀才くんで訳じゃねーから。むしろ、バカだから」

「え、え？ あなた、彼女じゃないの？ その子」

「そ、でもいーの。今会いたくねーんだよ。頼む」

ふうつと煙を吐くと、また岡田は笑った。これは、何か企んでいるらしい。「どんな陰謀なのかしら？」と聞いてみたけれど、笑って取り合ってくれるような気配はない。

「……わかった。それはいつの話？」

「明日」

「何時？」

「えーと、五時から二時間くらい」

「それで」私は岡田の真似をして口元を歪める。手を伸ばして、彼の手許から煙草を奪った。

たっぷり、煙を味わうように、吸い込んだ。酸素を取り込むように細胞が煙を吸収している。一度肺にためてから、ふうつと勢いよく煙を吐き出した。少しだけ、岡田の顔が隠れた。

「何を教えてくれるのかしら？」

\*\*\*

いわれた通りの時間、いわれた通りの場所に来て、私は早くも後悔し始めた。そもそも私は教えることがあまり得意ではない。

「何からやろうかしら」

「え、ええっと……」

ひとつの机に向かって隣り同士に座りながら、その場はなんともいえない空気に包み込まれていく。岡田の彼女は人見知りだったのか、とそのとき気付いた。

私も似たようなものだから、この空気の壊し方を知らない。

「……いつも通りの順番でいいわよ」

「あ、じゃあ……す、数学で、お願いします」

「わかった」

だんだんと小さくなっていく語尾に、思わず苦笑する。

関係ないけれど、この子は美人になりそうな顔をしているな、と思った。

「あのう……」

「何かしら。どこかわからない？」

「い、いえっ！」

その子は思い切り首を左右に振った。ひとつに結んだ髪の毛が後から追いかけるばさりと揺れる。そのあまりの勢いは、首がおかしくなるんじゃないかと思うほどだ。

「ちょ、落ち着いて。えっと……那智<sup>ナチ</sup>、ちゃん？」

私が心配のあまり慌ててそう呼びかけると、その子はふっと動きを止めた。それからすぐに顔が真っ青に変わる。

「ちょ、大丈夫？」

「へ、ヘーキですう……」

虚ろな目で、那智ちゃんはそういった。この子バカだわ、そう思ったけれど口に出さなかったのは、呆れて声が出なかったからだ。しばらく気持ち悪そうに那智ちゃんは下を向いていて、私は背中をそつとなでてあげた。

「す、すみません」

「いいわよ、別に。私も教えるのはあまり得意じゃないし、時間つ

ぶしになってちょうどいいわ」

「えへへー」

那智ちゃんはまだ顔色が悪そうだったけれど、それでもにっこりと笑った。この子は、笑顔がつかれる子なんだな、と思った。

「あの、き、聞きたいことがあるんです」

「何？」

「岡やん、元気ですか？」

那智ちゃんは不安気な目を私へ向ける。ああ、そうか。この子は恋をしているんだった、と思った。

「ええ、元気よ。会ってないの？」

「いえ、会ってます。でも最近、何か考えてるみたいで」

「そう？」

「えへへ、元気ならいいんですっ」

その時見えた那智ちゃんの横顔は少しだけさみしそうで、どうしてか庄司さんがいつも見せるあの笑顔に似ている、と思った。

「バカね」

「え？ あ、はい。私バカなんです。岡やんにもよくいわれて、」

「違うわ」

私はなんだかおかしくなって、ゆるむ顔を隠すように右手をあてた。それでも目だけは那智ちゃんを見ていた。那智ちゃんも私を見て、きょとんと不思議そうな表情を浮かべている。

「違うの、バカは岡田よ。……ねえ、今日会いに行つてきなさい。さみしいならさみしいって、思つてることいったらいいのよ」

「へっ?」

私がそういうと、那智ちゃんは耳まで真っ赤に染めた。そのあまりに素直な反応がおかしくて、私はまた笑った。

「で、でも、そういうのって、子供っぽいとか、う、うざいとか、思」

「ありえないわ。だって相手は岡田よ?」

いくつになつても、恋をしている人間が考えることは結局同じじゃない、そう思った。この子は、少しばかり素直すぎるけれど。

「年上つて、那智ちゃんが思つてるよりもずっと子供っぽいものよ」

十年二十年と歳月をかけて、私たちが大人になれたかといえはそれはノーだ。

昔の自分が何を見て何を思っていたのか、そんなことは覚えていないけれど、根本的な考え方なんかはちつとも変わってはいないと思う。

たとえばそれは友人関係だとか、体裁だとか、見栄だとか、そういう外から見える自分にはかり敏感になって、うまく偽る方法を見出した。

けれどそれは結局、自分の本質とはなんら関係ないのだ。

「そうよね、そういうものよね」

「何が、ですか？」

「なんでもないわ」

微笑を浮かべて、軽く首を傾げた。那智ちゃんもわかっていないながら、同じように首を傾げてにこりと笑った。

「私も、バカよねえ」

「……そうなんですか？ 仲間ですねっ」

不思議そうな顔をしたかと思うと、次の瞬間には満面の笑みを浮かべる。本当に、よく笑う子だ。

それから二人で勉強を再開したものの、口を開けば恋の話題へすりかわっていった。

同姓を相手に、というより岡田以外の人とこうした話をするのは随分久しぶりだと思う。昔からよく友人に『あの人のどこがいいの？』といわれ続けてきた私は、次第にこうした話を苦手に思うようになった。

でも、岡田もそうだけれど、（相手がわからないこともひとつだ

が）否定しないでいてくれる。それが多分、嬉しかったのだと思う。

気が付けば予定の二時間は過ぎ、外は暗闇の支配が増していた。

もし、私がもう少し早く生まれていたら、もう少し早く出会っていたら、庄司さんがもっと遅く生まれていたら、たとえば岡田と那智ちゃんのように、恋人になれる可能性はあったのだろうか。

今も、その可能性はあるだろうか。

「バカみたいだわ……」

私は、庄司さんが欲しい。手を伸ばせばいつでも届くくらい近くに、いつでもあの笑顔が見れる特等席に、私はいたい。

庄司さんのことを考えると、私は泣いてしまいたくなるのだ。

見ているだけで幸せだとか、勝手に相手とデートをするシュミレーションだとか、そういうことで胸がときめくようなかわいらしい恋なんて、もうずっとしていないな、と思った。

私はそのまま、ひとりで飲みに行くことにした。久しぶりに、あのカフェバーへ向かう。庄司さんとよく行く店ではない。私が初めて彼と出会った店だ。

ひとりで行くのはかなり久しぶりだな、と思った。

「おはよ、ケンちゃん」

オレンジ色の灯りで照らし出される店内、カフェバーというだけあって、学生の姿もちらほらと見える。今はまだ八時を少しまわったところだ。

白いストライプシャツに濃紺のパンツを身に付け、がっちりしたたくましい背中声に声をかけた。



「おう、サツちゃんじゃん！ 誰と来た？」

不思議そうな顔をして振り返ったケンちゃんは、私の顔を見るとにかつと笑った。きれいに並んだ歯が見える。

私は思わず苦笑いを浮かべる。

「今日はヒトリよ」

「え、めつずらしー！ なんかあつたの？」

真っ黒に日焼けした、見るからに体育会系のケンチャン。バイトの制服を着ているせいか今はそれがわからないけれど、さわやかそうな笑顔は顕在だ。

見た目通りの好青年で、数少ない私の友達。

せわしなく動き回る人の中からケンチャンを探すのは、いつだって簡単だ。無駄に身長が高いケンチャンは、ヘタをすると頭二つ分飛び出ている。

「どしたん？」

「別に。ただ来てみただけよ。相変わらず雑用なの？」

私が厭味っぽく見やると、ケンちゃんも苦笑いで「まいったなー」と頭を掻く。

ケンちゃんは顔がとりわけ良い訳ではないが、身長が高い分周りから視線を集めてしまう。今も周りの喧騒が少しだけ遠い。すれ違う人と目が合う。

「でもたまに中で作らせてもらったりしてる」

「たまに、ね」

「笑うなよ！」

手先が不器用なケンちゃんは、もう半年近くここでバイトをしているのに、未だカクテルひとつまともに作れないらしい。

笑っては失礼だと思うけれど、込み上げてくるものには勝てず、私は口元に手を当てながらくすくすと肩をふるわせた。

「はあ、俺仕事あるから行くな。カウンター席来るんだったら後で俺の腕前見せてやる」

「あら、楽しみね」

「信じてないだろ！俺だっていつつも失敗してるわけじゃ」

「失敗してるんじゃない」

「ああ、もういい！じゃーなっ」

「またね、楽しみにしてるわ」

私はまた笑いそうになりながら、胸元でひらひらと手を振った。けれどケンちゃんはずぐには動き出さず、立ち止まって何かを思い出すように額に手を当てた。

「どうしたのよ」

「あの人」

「あの人？」

「そう、えっと……前にカジを送ってったサラリーマン」

「ああ、庄司さんね」

突然出た名前に多少ドキリとしながらも、至って平然とした態度を装って、私はかくりと首を傾けた。

「来てるよ、ついさっき見かけたんだ。杰とかも、一緒だった」

「……そう」

喧騒が一気に遠のく。心臓が、一瞬止まった気がした。  
冷静に振る舞うのはいつも、思うより難しい。

「ありがと、じゃあまたね」

「おう、飲みすぎんなよ」

「大丈夫よ」

そんなに子供じゃないわ、そういつて笑った。ケンちゃんもいつもみたいに笑って、人の中に消えていった。

キツと前を見据える。こんなにたくさんの人の中からだけど、探そう、そう思った。こんな偶然、めったにない。

自分の胸の鼓動にくらくらしながら、以前岡田と庄司さんがいた

二階へ急いだ。

登りながら何度もきよろくとフロアを見渡す。岡田はともかく、庄司さんの背は高い方だ。ケンちゃんと同じか、それ以上はある。大体がこの店にスーツで来る人は珍しいので、近くにいたならすぐに見つけられるはずだった。

どこで見たかくらい、聞いておけばよかった。自分の余裕のなさに、自嘲気味に笑った。

「あ」

「お」

「ハラダっ！」

「うわ、酒臭い！ ちょっと、離れなさいよ」

一階と二階の間、少し広い踊り場で立ち止まっていたら、急に後ろから誰かに抱きつかれた。大分酔っている。

「んー？ お前でかいなー、俺より高い？」

「岡田？ 酔ってるわね。っていかでかいつて何よっ」

私は必死になってまわされた腕をほどうともがく。私より細くて白い腕は、意外に力が強い。

「おーか、<sup>サチエ</sup>佐知江ちゃん困ってるって」

いつのまにやら二人の男性が隣に立っていた。ひとりは岡田を離そうと手伝ってくれて、ひとりは笑いながら見ている。灯りは少な

かったが、笑っているのはすぐに庄司さんだとわかった。

「んー、やわらかーい……」

「ちょ、離しなさいってば！」

庄司さんを見て、私は更に必死になつて引き剥がそうとした。それを、やっぱり笑って見ている庄司さんが、少しだけ腹立たしい。

「庄司さん！ 笑ってないで助けてください」

「岡あ、寝るなよ？ おい……って寝た？」

「うそっ！」

「おーきーてーるー、うつせーな」

「どっちがよ、突き落とすわよ」

「んー」

「那智ちゃんにいうわよ！」

「えー……別に？」

なんて厄介な人なんだろう！ 困り果てた私は、未だ引き剥がす  
の手伝おうとしてくれる男性 確<sup>イヌミ</sup>か泉<sup>イヌミ</sup>といった に視線を向け、それから庄司さんを見た。

「庄司さん、まだ笑ってるのね……」

「ごめんごめん。ほら、杰くん？ おいで」

そういつて庄司さんが岡田の頭をポンポンと叩くと、「んー」といつておもしろいくらい、岡田は簡単に離れた。

酔っていても、岡田は庄司さんのいうことだと素直に聞くのか。

「リーひと、眠い」

いい大人が、しかも男が、どこか甘えた声を出す。

「そう。泉、どうする？」

私と変わらない身長 of 岡田が、庄司さんにもたれかかるようにして立つ姿は、妙に似合っていた。

一瞬、本気でそっちの趣味があったらどうしようかと思うほどに。

「とりあえず、岡は帰した方がよさそうですね」

「かえらないー」

「……あきれたわ、駄々っ子じゃない」

解放されて少しほっとした私は、改めて見る岡田の姿に心底あきれたため息をもらした。

「なんか、イヤなことあったみたいなんだ。今日のことは多めに見てやってね」

申し訳なさそうに謝る泉さんに、この人も大変なんだわと苦笑い。

なにがあつたのか、少しだけ気になった。  
そういえば、岡田が相談とか弱音を吐く姿は見たことがない、と思った。

「じゃあ、僕は送ってくるよ」

私がじつと岡田を見ていると、庄司さんが、やっぱり少し笑ってそういった。

すかさず隣にいた泉さんが「いや、俺が行きますよ」と声をあげる。

「そう？　ってお前、彼女に会いに行くのか？」

「はは、敵いませんね」

\*\*\*

「じゃあ、二人で楽しんでください」

泉さんにそういわれて店内に残されてから、もう三十分は経とうとしていた。

なぜか、お互い無言のまま。

理由はわからないけれど、庄司さんが余り気分をよくしていないことだけは、なんとなくだけれどすぐにわかったし、そんな庄司さんの態度に私はいつも以上に緊張してしまって、気の利いた台詞ひとつ浮かばなかった。

「……杰が、ね」

「えっ」

突然話し掛けられ、私は目を大きく見開いた。怒られるような気がしていたから、びくりとふるえてしまう。

庄司さんはそんな私の様子には気付いていないようで、どこでもないどこか、宙に視線を泳がせていた。  
私を見ないで。

「喧嘩したんだってさ、ちょっと前に」

「……ああ、那智ちゃんね」

「そう。泉に誘われて会って見たら、すでに飲んでたみたいだね。すぐにあの調子だよ」

ふっと身体全体の力を抜いたみたいに、庄司さんは笑った。男の人にこんなことを思うのはおかしいのかもしれない。けれど、この人には色気がある。大人の、というわけでは多分なくて、男性の。

「……疲れているの？」

庄司さんは少し驚いたように、目を開いた。それからやっと、私を見てくれた。

素直に大きく響いた、心音。

「少し、ね」

「なにかあったの？」

「大したことじゃないよ」



にこりと笑う、彼の顔から目が離せない。  
やはりその表情はどこか疲れたようで、いつもとは違うものだった。

「……そう」

私は女で、まだ学生で、きっと庄司さんの抱える苦勞なんてわからないことの方が多い。こんな私なんて、きつものすごく頼りない。

さみしい。

でも多分、それがそのまま私と庄司さんの距離なのだろう。私にはただ、受け入れることしかできない。

私も、笑ってみた。目が合って、庄司さんもまた笑ってくれる。

息が止まるような、時間。

夜の闇へ、音は溶け出して消えてゆく。

何も聞こえなくなつて、見たくなって、少し、かなしくなつた。  
わかりあえやしないんだわ。そう思った。

私がこの世に生まれ落ちた瞬間から、庄司さんが手の届く距離にいつもいてくれていたとしても、きつとわかりあえない。

重要なのは多分、隣にいることじゃない。過ごした時間の長さでも、ない。わかりあうことじゃない。

少なくとも私にとって、庄司さんにとって、そんなことはこれっぽっちも慰めにならない。

先程よりも素直にその影を見せる横顔を見ながら、一人思考をめぐらせた。

じゃあ、私にできることは？

「あ、電話」

庄司さんがちらりと私を見た。気を使っているのだろう。胸ポケットに携帯電話を入れているらしく、少し困ったような目を向けてくる。私の耳までは音が届かないが、庄司さんにはその音色が届いているようだ。

「気にしないで」

私はひらひらと顔の前で手を振ってみせる。

「ごめんね」といって庄司さんは携帯電話を、本当に申し訳なさそうに取り出して、通話ボタンを押した。

立ち上がる様子はない。顔をそむける様子も。

それに少しだけ、安心してしまふ私がいた。

あまり見ていては失礼だわ、と思い、自分のグラスに視線を戻した。ほんのり底が紫色をした、オレンジ色の液体が映る。そういえばケンちゃん、いるかしら。

私が座っているのも、一応、カウンター席のひとつだった。二階の階段近くに位置し、一階二階それぞれのフロアの中央にはもつと広い円形のカウンター席がある。あとは一階の奥の方にも、ここと似たような席があったはずだ。ケンちゃんはどこだろう。

私はまた、庄司さんの様子をうかがった。話し中だ。その表情からはほとんど何もわからない。

庄司さんと二人だけのときは、決まってこういう席に座る。ただ単に二人だからなのかもしれないけれど、この距離は好きだ。それは、庄司さんの横顔が好きだからなのだと思う。

いけない、とは思いつつ、会話に耳を傾けてしまふ。

でもそれも、ほとんど相づちを打つばかりで、内容などはほとんどわからない。

しばらくして庄司さんがシルバーの携帯電話を耳から離れた。ストラップもなにもついていない、シンプルな携帯電話だ。

「ごめんね」

「いいえ」

誰から？ と聞きそうになる私がいた。でも、私にそんなことを知る権限は、ない。プライベートまで踏み込むようなことはしたくない。

グラスで揺れていた液体を、一気に飲み干した。喉が熱い。

ことん、と音を立てて、グラスを元のカウンターの上へ置いた。

「……帰るわね」

何を話しているか、わからなかった。否、聞こえないフリをした。

《エリ、わかったよ。その話はまた今度、しよう》

聞こえなかったことに、したかった。

もう、会うべきではないのかもしれない。話をするべきではないのかもしれない。

好きでいるべきでは、ないのかもしれない。

「どうしたんだい？」

そういつて、私の顔を覗き込もうとする。私はただうつむいて、

首を左右に振るだけだった。声を出したら、泣いてしまいそうだったから。

私は、あなたが瞬きするその一瞬にも、バカみたいに恋をしているのだ。

鼓動が早すぎて、頭が追いつかない。

「ごめん、僕、何かしたかな？」

「いいえ、違うのよ。気にしないで」

「あ、やっぱり電話？ 嫌ならいつてくれれば出なかったのに」

「違うの、本当に。庄司さんのせいじゃないわ」

だって、私が好きなせいだから。右も左もわからなくなるくらいに、あなたを好きになってしまった、私のせいだから。

「今日はちょっと、疲れたのよ。元々、友達の様子見に來ただけなの。用は済んだから」

違う。本当は、記憶のあなたに浸かりたかっただけなの。私は、もっと簡単で、かわいい恋がしたい。それなのに。

「本当に？」

「本当よ、」

口元だけで笑って、必死に、何かに耐えるように必死に、私は顔を上げた。今は、泣けない。泣かないから。

だからもう少しだけ、側にいる夢を見させてほしい。

「……送っていくよ」

「大丈夫よ、そんなに遅い時間じゃないし、電車、あるもの」

「ほら、文句いわない。こういうときは黙って送られとくもんだよ」

ね？ といって、彼は笑った。崩れそうになる。

想うだけで泣けそうなの。笑ってくれるだけで、時々、あなたを残して世界が終わるんじゃないかって想うくらいに、他が見えなくなる。

「本当に、大丈夫だから」

いつもだったら飛び跳ねるくらい嬉しい言葉。でも、それは庄司さんがやさしいから、きっと、女性になら誰にでもそうなのだね。今までだって、わかっていた。わかっていたの。

わかっていても、嬉しかったけれど。

「ねえ、本当に、どうしたんだい？」

「ごめんなさい、」

泣かないで、お願いだからもう少しだけ、耐えて。

慰められるのだけは、ごめんなのよ。

私はただ、席を立った。早く、離れたかった。この場から。ぐらぐらと揺すぶられている私自身に、耐えられなかったから。

「帰る、わ。今日は、会えて、よか……っ」

嘘、やっぱり、出会わなければよかった。

あなたの特別になれないのなら、出会わなければよかった。

こんなことで泣いてしまう自分、私はあなたのことになると、こんなにも脆い。

「サチエ、ちゃん？」

「ごめんなさ、どうしたのかしら、私。ごめんなさい、本当に、帰ります」

「待つてっ」

庄司さんが、行こうとする私の手を取った。痺れるみたいに、熱い。麻痺したみたいだった身体の感覚が、そこだけ異様に敏感になっている。

それなら、私はどれだけ待てばいい？ あなたの心を手に入れるために。

「やっぱり、送るよ」

「いいのよ、放っておいて。私、大丈夫だから」

「ダメだつてば！」

突然の強い声、私を掴む手にも力がこもったのか、痛いくらい強い力で掴まれた。

庄司さんらしからぬ怒鳴り声に、私の涙も止まってしまう。

「ダメだつて、危ないよ。そんな無防備に」

恐る恐る庄司さんの顔を見ると、ばつが悪そうにしょんぼりとした目をしていた。いつも、そうだ。そうやって私を期待させる。

「送るよ、家まで」

私と目が合うと、庄司さんは少しだけ、哀しそうに、笑った。そんな気がした。

車内は、とても静かだった。エンジン音もほとんどしない車だったから、余計に、沈黙がうるさかった。置き去りにされた風の音が、耳鳴りのように響く。

さつき見た庄司さんの表情が、消えない。

居心地の悪いドライブ。私は今、誰よりも近い場所にいる。けれど、結局は物理的な距離でしかない。

苦しくなるくらいにいいとおしい横顔も、今は見れない。

私は今、この場所から逃げ出したい。

庄司さんへの想いと同じように、逃げ出したいのだと、思う。だってもう、苦しいから。

取り留めのない自問自答、何度だって繰り返してきた。まったく相手にされてなくとも、何度も、私はあなたが好きだと、想って、想い続けてみせた。あの日の返事だって、私は気にしていない。それでもあなたが良かったから。

でも、それももう、終わりなのだと思う。

結果が同じなのに、繰り返し繰り返し、変わらずに想い続けている意味は？

沈黙がうるさい。

「何か、流しても、いい？」

「え、あ、ああ。いいよ、」

私はなるべく庄司さんを視界に入れないように下を向いて、ラジオのスイッチへ手を伸ばした。独特のザーザーという音が現れる。それは気まずい沈黙をより一層強調させた。

適当に合わせると、流行りの曲が溢れ出した。バカみたいに明るだけの、救いようのない音楽。それは、今の私たちにはなんとも不釣り合いで、いつもは雑音に紛れて気にならないそれが、妙に白々しく響いてくる。

早く、帰りたい。

もう、疲れてしまったのだと思う。不毛な片思いに。惨めになっていく私に、耐えられない。

誰か、教えて。

この想いの終わらせ方。

「それでは、本日はこの曲でしめましょう。ラジオネームにゃんこさんからのリクエスト、曲名は」

なんてことはない、ラブソング。ラジオから溢れるのはそんな曲ばかり。愛しい誰かのために歌う曲は決まってハッピーエンド。不安も苦痛もない。

誰も上手な恋の終わらせ方なんて、教えちゃくれない。

「ねえ、庄司さん……」

「、なんだい」

胸が苦しい、息がつまる。



私はひとりで、恋をしてる。

いいたことは、たくさんあった。

私を望まないのなら、これ以上やさしくしないでほしい。

「……さっきも思ったけど、今日は元気、ないね」

そういつて運転したまま、私の頬に軽く指先で触れる。返事をしないでうつむいてみると、彼の指は触れるか触れないか、その存在だけを感じさせて、私の視界を上昇して消えた。横に流している長い前髪が、かすかに揺れる。それから確かめるようにやさしく、ペたりとおでこに指が触れるのを感じた。血液が全部顔に集まったみたいに、熱くなる。ぎゅっと目を閉じてみたが、確かに潤みだした瞳はもう、どう頑張ってもごまかしようがなかった。

泣きたくないのに、涙腺は熱に弱くて。

「っ、庄司、さん……」

声が、掠れた。喉に違和感を感じる。熱も。

締め付けられたみたいに呼吸のままならない肺。泣きたくないのに熱ばかり集める目元。

やっぱり、私はあなたが好きなんだ。

「なんだい？」

なんでもないことみたいに、彼の指は私の涙をすくった。こちらを見ている気配なんてまったくくないのに、気付いていたようだ。

まったく、なんて人なのだろう。これではまた、好きだと思ってしまう。

離れていった指先を思って、私は頭の中だけで苦笑いをこぼした。

「私、もう、さいごにする……る、から、もう、いわないから、だから……っ」

「……うん」

「いまからいうこと、わすれても、いいから。いいから。もう……あわ、ない……から、」

我慢しても我慢しても、込み上げるものに堪え切れず、はつきり聞こえたのかはわからない。

だけど私は、いいたくて、一言だけ、いいたくて。

これ以上、やさしさに触れたくなくて。

「……き、」

ようやく出た言葉は、自分でもわからないくらいに掠れた空気。秋に吹かれる落ち葉みたいな、活力の乏しいもの。

ここを越えたなら、私も、変われるだろうか。

色付いて、舞い落ちる。

それだけじゃ終わらない、落ち葉みたいに。この恋を、肥やしにして。

「はじめてあった時から、ずっと……ずっと、」

すき、もう一度いおうとしたとき、車は急ブレーキ。私たち以外の車はほとんど走っていなかった道路の脇に、止まった。前につんのめって、思わず涙も引っ込んでしまう。

何が起こったのかしばらく私にはわからなくて、身体を座席に戻

しながら、ただ呆然としていた。

「……しょ、じさん？」

訳もわからず、名前を呼んでみる。さっきまであつた熱は一気に冷めてしまっていた。

代わりに沈黙と重たい空気が戻ってくる。いや、エンジンも切ってしまったようだったから、さっきよりもはるかに静かだ。

「ごめん」

一瞬、言葉の意味が理解できなかった。私に向けられているなんて思えないほど、一人よがりな響きを含んでいる声で、ハンドルを覆うように両手をつき、頭を乗せて背中を丸めている庄司さんが、いつもと同じ彼だと思えなかった。

ああ、終わったんだなあと、そう思うことを私はやっぱり、どこかで拒否していたのかもしれない。

「、ごめん……」

ぼつり、そういった。

その声を聞きながら、あの日の私の言葉がどれほど意味のなかったものかを思い知らされた。結局、今までいつてきたことはすべて、本気にとられていなかったのだ。

こんなに沈み込んだ声は、今まで一度だって聞いたことがない。

「っ、いいわ、気にしてないもの。……驚かせてごめんなさい。私は、ここで」

ハンドルに身体を預けたさっきの体勢のまま、庄司さんは少しだ

け顔を上げて私を見た。戸惑いの色が浮かんでいる。こんなときだけれど、あなたのそんな目を見るのは初めてだ、なんて感動してしまふ。

私はその動揺が気付かれないよう、すぐに身体ごと逸らした。ドアに手をかける。開かない。そうだ、カギがかかっていた。思い直してロックを外そうと手を伸ばす。それに触れる前に、身体が後方に沈んだ。肩を強く引っ張られた私は、突然の力に抗うこともできないまま、倒れる、そう思った。

「……ごめん、本当に」

耳元で聞こえる、いつもより低い声。空気が耳を、頬をかすめてくすぐったい。

身体の前に回された腕は、思っていた通り、少し固い。

何を考えてるかなんてまったくわからないけれど、庄司さんの腕の中にいるんだ、と認識したらやっぱり、幸せな気持ちになれてしまった。

「……降りるわ」

「ダメだよ」

「もう、いいのよ。私、ひとりで帰れる。子供じゃないわ」

「でも、女だ。……そうでしょう?」

信じられないという顔で、私は顔を彼へ向けた。さっきよりずっと近くで、私を見ている彼の目を見つけた。彼はやっぱり、少し困ったように笑った。

彼の腕がゆるんだ。そうしてあの指が、私の頬をなでた。視線が

外せない。

骨張った指が、輪郭をなぞるように下へ降りる。その間も、私は彼の視線に応える。顎の先までなぞると、彼はふっと視線を落とした。手が、添えられた。唇を見られている、私は恥ずかしくなって視線を落としてしまう。

それから、添えられた手に少しだけ力が入ったのがわかった。彼の方に少し、引っ張られている。躊躇いながら目を閉じたのと、唇が触れたのはほぼ同時だった。

「……、あ、あの、」

「黙って」

いつもより、少し低い声。確かめるように何度も、触れるだけの口付けを繰り返す。夢でも見ているんじゃないだろうか、こんなの。だって、おかしい。

どこだかわからない道の途中で、明かりのない車の中を、度々追いつ抜かしていく乗用車のヘッドライトが照らしていく。

もう何度目かわからない。どれくらいそうしていたかも。私はこっさり目を開けた。顔が近い、そう思ってまた目を伏せると、額がくっつけられた。

「、ごめん」

「……なによ、」

「ずっと、からかわれてるのかと思ってた。泣かせるつもりなんてなかったのに」

「私、冗談でそんなことはいえないわ」

「そうだよな」

そういつて笑って、また唇が触れる。その表情が、なんだかとても憎たらしくなってしまうと、「……ダイキライ」といったら、瞳が哀しそうに揺れた。少し罪悪感を感じるけれど、でも。

「ずっと、信じてくれてなかったのね？」

「そうだったらいいな、とは思ってたよ」

「なによ、それ……」

「僕はもう、若くない。君みたいに、もう、華やかな未来なんて描けないし、それに、」

唇を耳元に寄せて、彼はささやく。

それは夢みたいに、くらくらくらくら、恥ずかしさから体中が火照るのがわかった。

「っ、庄司さんっ!」

「なあに？」

楽しそうに笑っているから、また言葉を失う。本当は意地が悪いだけなのか、そう思ったけれど、いえない。

私が何もいえないまま固まっていると、彼はくすりと笑って、軽く頬を包むように指先を添え、つついた。

「泣かせたお詫び、しなきゃね」

きょとんとしたまま、彼と目を合わせる。「このまま僕の家、行かないかい？」彼はにっこり笑って、確かにそういった。心臓が一瞬、跳ね上がる。鼓動が身体中で、うるさい。

「き、聞きたいこと、ある、の」

「ん、いつてみて」

「あの人のこと、」

「あの人？」

「恋人、昔、忘れられないって、いつてたじゃない……」

語尾が次第に弱くなる。自分で聞いておきながら泣きそうな私は、本当に、どうしようもない。

勢い任せでいったあの日の告白は、なんてことはない。ただ、私ならあなたを一番にするのと思ったから。

確かに、あんな状況で告白するなんて、同情といわれても仕方なかったかもしれない。

「……覚えてたの？」

「さっきの電話、そうなんでしょう？」

「あ、ああ。そうだけど、」

「また、いわれてるんじゃないの？」

どうして、素直に応えられないのか、私が望んでいたのに、  
いったそばから後悔してる。

庄司さんは、やっぱり、笑っていた。

「嫉妬？」

「な、なんでそうなるのよ！」

「違うの？」

「っ、もう、いいから答えて」

「僕だったら嫉妬するなあ」

私が睨むと、彼は笑う。「そんなに心広くないんだよ」

「……そうよ、嫉妬してたのよ。バカみたいだね」

「よかった」

彼はそれだけいってまたひとつ笑った。

ハンドルを握る。エンジン音とわずかな振動。

夜はまだ、長い。

「END」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1637d/>

---

愛染果実

2010年12月21日09時55分発行